

連続講座 第1回

「今はもう戦争体制？日本の現状を問う」

アフリカ中央部における紛争と

国連平和維持活動(PKO)

—なぜ自衛隊は南スーダンに派遣されたのか？

米川正子さん講演会報告

(立教大学特任准教授 元UNHCR職員)

八木巖

明らかに「PKO参加五原則」違反である南スーダンへの自衛隊PKO派遣。そのPKO部隊に「駆けつけ警護」「共同防衛」という違憲の疑いの強い任務を付与した安倍政権。自衛隊員は殺し殺されるという状況に、今陥っています。私たちは街頭での訴えや、自衛隊小牧基地などでの申し入れで、「早く引き返すよう」に要請をつづけていますが、現地状況は気がかりです。

私は、自衛隊南スーダン派遣反対という意見に関して、一つの懸念を持っていました。それはNGOのJVC(日本国際ボランティアセンター)の今井高樹さん(不戦ネットでも講演していただきました)が、昨年10月におこなわれた現地報告の講演のなかで、「南スーダンのジュバの状況について、戦闘だ、いや衝突だ、というような日本国内での議論を、現地の人々が聞いたらどう思うでしょう？」という疑問を寄せられたときにうかんだ懸念です。「危険」が派遣の是非の判断基準になることへの懸念がうかんだわけです。その講演会では、南スーダンの7月以降の状況が報告されました。それを聞いた私は、「やっぱり戦闘があったんだ。危ないんだ。」で終わらせてはいけないというふうに思いました。それでは、危険なところへ自衛隊を行かせる必要はない、となってしまう。危険だから行くなではなく、自衛隊が行く意味がないし、行ってはいけないから行くなということです。政治的、軍事的意味をもって自衛隊は派遣されているのですから、その意味合いをもっと考えなければなりません。自衛隊派遣の背景についても考えなければいけません。危険であっても、働き続けているNGOや人道支援組織があります。それは現地にとどまる大きな意味があるから、とどまって活動を続けているのです。危険かどうかではなく、現地の市民の目線が必要だということです。

アフリカの状況を「民族対立」(たとえばデインカ対ヌエルなど)だけで理解することはできません。背景があ

るからです。もう少ししていねいに、現地の状況を知り、自衛隊派遣の背景を知ろうと思い、米川正子さんに講演依頼をしました。米川さんは立教大学特任准教授です



が、元UNHCR(国連高等難民弁務官事務所)の職員で、「平和以外なんでもある国・コンゴ民主共和国」現地で働いておられた方です。コンゴや中央アフリカの状況に詳しい方です。米川さんは、安倍政権の「駆けつけ警護」の議論が始まったとき、おかしいと思ったということです。それは、マクロの視点からの疑問ということでした。PKOってそもそも役にたっているのかという根源的な疑問からだったようです。たとえばコンゴでは何度もPKOが派遣されていて、長期にわたっている。これはPKOがうまくいっていない証拠ではないか？とされていました。住民保護と言いながら、住民はPKOに保護されておらず、レイプなどの人権侵害にも対処していません。住民もPKOに期待していないという現実が報告されました。PKOの「質」も悪く、現地PKOが資源持ち出しに関与していたり、ルワンダでの虐殺に関った人物がPKOの幹部になっていたりの事実が明らかされました。また2013年には、コンゴの政府とPKOが一緒になって反政府勢力を掃討するなどのことがおこなわれ、「中立」とは言えない状態です。結論的に言われたのが、PKOと現地政府、そして反政府勢力が「戦争状態」を維持することで、それぞれが利益を得ている構造＝戦争経済ができていて、ということでした。平和維持軍ではなく、戦争維持軍である、と言われていました。

アフリカでの「紛争」要因は3種類あり、1つは欧米諸国対イスラム過激派、2つ目は欧米諸国対中国、3つ目が米英対フランスということです。

アメリカは2008年AFRICOM(米国アフリカ軍)を創設し、対テロ戦争の軍事訓練を始めている。また、ルワンダやコンゴでの「ジェノサイド」にもアメリカは関与しており、現在はルワンダ、ウガンダという同盟国と連携している。背景にはアフリカの石油やレアメタルなどの資源の存在があるということです。1989年以降、スーダンはイスラム原理主義の影響力が高まり、そのため、イスラエルがスーダンの内紛にずっと関与していた、そうです。(ということは、南スーダン独立後のPKOも対

イスラムという意味合いがあるということ。)私は、自衛隊が、ジブチに基地をおき、南スーダンにPKOを派遣しているということは、アメリカとともに対テロ戦争に実質参加しているのかもしれない、そう思いました。少なくとも、準備は始めていると思います。自衛隊が南スーダンで道路を補修したり、水道施設をつくっていることも、「すばらしい」とは単純には思えません。自衛隊は医療や人道支援に徹して活動すればいい、という意見もありますが、自衛隊は「軍事」組織です、それも、米と密接な関係をもった「軍事」組織です。

次に米川さんは、NGOと軍隊との「連携」ということを言われました。NGOは先に紹介したJVCなど素晴らしい活動をしているところがたくさんありますが、その「善行」のイメージを利用し、あるいは団体を利用し、軍人が現地民衆のなかにはいりこみ、医療や物資の提供と引き換えに武装組織の情報を聞きだすなどの活動をしていることが指摘されました。「軍事」と「民生」を分けるというルールは存在するけれども、その線引きがあやしくなっているとのことです。(米がイラクやアフガニスタンでやった医療活動などを軍事組織がやるなどしたPRT＝地域復興支援がありました。このため人道支援の現場に大きな混乱をおこしました。注＝八木)私は日本政府の進める自衛隊・PKO、JICA、NGO、企業が連携してすすめるオールジャパン方式は危険だと思います。

米川さんは最後に意味深い現地のことわざ「二頭の象(＝リーダー)が争うと、苦しむのは草・草原(＝市民)である」、そして、「二頭の象が愛しあっても苦しむのは草・草原である」が紹介されました。講演後の質疑応答の時間には多くの質問が出て、時間がきてしまい、打ち切りにしました。もうしわけありませんでした。でも活発な集会になってとてもよかったです。以上、米川さんのお話しを、若干私の意見を加えて紹介しました。

全講演記録はYoutubeにあげました。
<https://youtu.be/llsP6tUPPVI> です。不戦ネットの関った講演会はほぼYoutubeにあげてありますので、可能なら検索して見てください。

自衛隊PKO派遣とNGO

先日NGO関係の方にうかがったのですが、10月1・2日に「グローバルフェスタ JAPAN2016」という催しが東京のお台場で開かれました。NGOや国際支援機関や企業が参加しての催しですが、今年は南スーダン

での自衛隊の活動が紹介され、自衛隊の装備品などが展示されていたとのことです。安倍政権のオールジャパン体制の宣伝の場となっているわけです。「民生と軍事の一体化」です。

NGOと外務省は定期的に協議を行っていて、「連携推進委員会」「ODA政策協議会」という協議会の場所があります。どんな話し合いがされたかの正式な記録は外務省のホームページにありますので、参照していただきたいのですが、この場でも「秘密保護法」のことや、「現地農民を追い出す結果となったモザンビークでのODA事業」、「南スーダンPKO派遣」、「安全確保」「渡航制限」などの議題を提起し、話し合いがなされています。時間的な制限もあり、課題も多く十分ではないと思いますが、話し合いがなされることが大事です。NGOの多くは資金面で苦勞して、外務省のODA資金の援助をうけていますので、大変難しい面もありますが、NGOとしての主張はしっかり続けているという印象です。みなさん、NGOの活動はなかなか表面にはあらわれませんし、理解も不十分ですが、大事な活動です。非政府組織として続けていくために、資金的にも支えていくような協力をお願いします。



グローバルフェスタJAPAN2016

防衛省ブース
「迷彩服の試着」防衛省HPより